ホットアート2005
市川市文化祭

第313回 市響

「交響楽の午後」

グリンカ ／ 歌劇「ルスランとリュドミーラ」序曲
ムソルグスキー ／ 交響詩「はげ山の一夜」
*
グラズノフ ／ アルト・サクソフォンと弦楽のための協奏曲
*
ツェムリンスキー ／ 交響詩「人魚姫」
2005年4月2日アンデルセン生誕200年記念

指揮
田久保裕一
http://www.musicinfo.com/takubo/

Alt-Sax. solo
彦坂眞一郎
http://www.hikosaka.com/

管弦楽
市川交響楽団
http://www33.ocn.ne.jp/~ichikyo/

平成17年7月17日 日 14:00開演〈入場無料〉
市川市文化会館 大ホール
JR総武線・都営新宿線 本八幡駅 下車15分

主催：市川市／市川交響楽団協会
お問合せ：047-372-0258 市川交響楽団 横田

本日のプログラム

グリンカ	歌劇「ルスランとリュドミーラ」序曲
ムソルグスキー	交響詩「はげ山の一夜」

＊

グラズノフ	アルト・サクソフォンと弦楽のための協奏曲 変ホ長調 作品109

＊

ツェムリンスキー	交響詩「人魚姫」

アルト・サクソフォン ソロ

彦坂 眞一郎（ひこさか●しんいちろう）

1982年東京芸術大学入学。85年安宅賞受賞。86年東京芸術大学を首席（管・打楽器において）卒業。88年CBSソニー、ザ・ニュー・アーティスト・オーディション'88においてFM東京賞およびクリスティーン・リード賞を受賞。89年東京芸術大学大学院修了。99年6月には東京オペラシティ文化財団主催の「B→C（ビー・トゥー・シー）」に出演し、好評を博す。人の心の内面を見つめるところから生み出されるその音色と音楽は、透明で力強い印象を持ち、デビュー以来多くの聴衆を魅了し続けている。マイスター・ミュージックより、ソロアルバム「バラード」「ダンス」「ケクラン：エチュード」をリリース。また、本多俊之、フェビアン・レザ・パネ、大貫妙子、おおたか静流らとのライヴやCDに参加。ソリストとしての活動の他、トルヴェール・クヮルテット（文化庁芸術祭レコード部門「大賞」受賞）のメンバーとしても活躍している。サクソフォンを忠地美幸、中村均、前沢文敬、大室勇一の各氏に師事。現在、桐朋芸術短期大学の講師を務める。

ホームページ　http://www.hikosaka.com/

指　揮

田久保 裕一（たくぼ●ゆういち）

東京学芸大学音楽科卒業。指揮を伊藤栄一、伴 有雄、汐澤安彦、秋山和慶の各氏に師事、1980年～1992年まで12年間、千葉県習志野市にて小中学校の音楽教師を経てプロの指揮者に転向。1992年～1993年、スイス・ルガノおよびウィーンにおいて、リヒャルト・シューマッヒャー氏、カール・エスターライヒャー教授、湯浅勇治氏、ハンス・グラーフ教授に師事。1994年11月、ルーマニア・ブラショフ市で開催された第4回「ディヌ・ニクレスク」国際指揮者コンクールにてグランプリ「ルーマニア現代音楽演奏賞」「聴衆特別賞」を受賞。これ以降ブラショフ響、バカウ響、トランシルヴァニア室内管などルーマニアでの活動の他に、スロヴァキア放送交響楽団、カザフスタンのアルマトィ市立管弦楽団、ベルリンにおけるベートーヴェンの第九交響曲など海外での活動も広がっている。2002年8月中国内蒙古自治区の呼和浩特にて内蒙古民族歌舞劇院交響楽団を指導。同団演奏会にて大成功を収める。多大な功績を讃えられ「名誉客演指揮者」の称号を受ける。これまでに国内の主要オーケストラを多数指揮。また、全国のアマチュアオーケストラや合唱団の育成にも尽力している。日本指揮者協会会員。東京指揮研究会代表。

管弦楽

市川交響楽団（いちかわこうきょうがくだん）

本年創立53周年目を迎えるアマチュアとしては全国有数の伝統を持つオーケストラ。

メンバーは現在100余名で年齢構成は20代から70代までの幅広い層にわたり、職業も会社員、教員、主婦など多彩。地元市川市での演奏会を中心に全国各地での文化行事やオーケストラ・フェスティバル等にもしばしば招かれ演奏を披露している。また、著名な音楽家との共演も数多く経験しているほか、特に地元ゆかりの音楽家との共演にも力を注ぎ、地域の音楽芸術の振興に多大な貢献をしている。

市川交響楽団は市川混声合唱団、市川交響吹奏楽団、行徳混声合唱団、市響ジュニアオーケストラの各団体とで構成する市川交響楽団協会の中核として“クラシック音楽をより多くの市民に楽しんでもらおう”をモットーに常に積極的な活動を展開している。

プログラム・ノート

グリンカ／歌劇「ルスランとリュドミーラ」序曲

グリンカは「ロシア国民楽派の開祖」と呼ばれ、ロマン派以降のロシア音楽を方向づけた作曲家です。

このオペラはロシアの文豪プーシキン原作で、キエフ大公の姫リュドミーラが悪魔にさらわれ、それを求婚者のルスランと２人の騎士が助け出し、結婚するというストーリーです。残念ながら初演は大失敗、当時のロシア皇族が「出来の悪い部下には罰として『ルスランとリュドミーラ』を見に行かせる」とリストに語ったという逸話があるほどでしたが、しかしこの序曲はテンポの良さと軽快なメロディが人気でコンサートではよく演奏されます。

全般にわたる弦楽器による早い動きは市響弦楽器メンバーの腕の見せ所です。またティンパニによる心地よい合いの手や、ルスランの歌うアリアを流用した中間部のチェロのメロディも聴きどころです。

ムソルグスキー／交響詩「はげ山の一夜」

ムソルグスキーはグリンカの後を継いだ「ロシア5人組」の一人で、他の代表作にはピアノ組曲「展覧会の絵」や歌曲「蚤の歌」があります。

この「はげ山の一夜」は、聖ヨハネ祭の夜（夏至の夜）にはげ山で繰り広げられる悪魔たちの集会と、夜明けには平和な世界に戻る様を音楽化したもので、ディズニーのアニメ映画「ファンタジア」を記憶されていらっしゃる方も多いと思います。ムソルグスキー自身この題材を大変気に入っていたようで、20年間にわたりオペラの一部などとして3回も作曲・改作を繰り返しました。

現在よく演奏されるのは、同じ「5人組」のリムスキー＝コルサコフにより、ムソルグスキーの死後補筆・編曲されたもので、本公演もこの楽譜を使用いたします。管楽器や打楽器が活躍し、色彩感のあふれるものです。もしよろしければ目を閉じてお聴きになり、その景色を想像してみてください。

グラズノフ／アルト・サクソフォンと弦楽のための協奏曲　変ホ長調　作品109

グラズノフらしく民族音楽的ではありますが、弦楽＋サックスという最近ではめったにされない組み合わせがこの時代の象徴のように思えます。とにかく、サックスの柔らかい音色と弦楽器がよく合っていますし、早いパッセージもお見事です。第２楽章は泣かせどころです。全楽章続けて演奏されます。

第１楽章　アレグロ・モデラート　　第２楽章　アンダンテ　　第３楽章　アレグロ

〈彦坂眞一郎さんのこと〉

宮崎裕二

本日ソロを演奏して頂く彦坂眞一郎さんは、日本最高峰のサクソフォン奏者で、市川市の出身です。小学生の頃には父親の影響もあり漠然と、美術の道に進みたかったらようですが、中学校に入学したとき、吹奏楽部顧問の先生のサクソフォンの音を聞き、「これだ！」と思いサクソフォンを始めようと思ったそうです。入部当初は1ヶ月ほどクラリネットを渡されていたのですが、どうしてもサクソフォンが吹きたいと楽器を変更してもらい、また毎朝のレッスンも同時にお願いしたそうです。そのようにして基礎を学び、その後東京芸大を経て現在にいたるわけですが、その原点全てがここ市川市にあります。

本日演奏するグラズノフは、彦坂さん曰く一番好きな曲との事で、どの様に調理し、そして皆さんを魅了して頂けるのか非常に楽しみです。また普段あまり耳にする機会の少ないクラシカルサクソフォンの音色。十分堪能頂きたいと思います。

＊宮崎裕二さんにはリハーサルで何度もソロの代理で素晴らしい演奏をしていただきました。市響メンバー一同、心から感謝を申し上げます。

ツェムリンスキー／交響詩「人魚姫」

指揮者　田久保裕一

20年ほど前、「抒情交響曲」を聴き、私ははじめてツェムリンスキーという作曲家を知りました。そして「人魚姫」は8年ほど前、指揮者であり友人の本名徹次さんから紹介されてCDを聴くことになり、「なんと美しく、悲しい音楽だろう」、その第一印象は、こんな陳腐な言葉では表現しつくせないほどの感動でした。今回の演奏会はこの衝撃的な出会いの後、いつかはこの作品を指揮してみたいと温めていた計画なのです。

ツェムリンスキー（1871～1942）は19世紀末から20世紀初頭にかけてのウィーンでマーラーやシェーンベルクと共に活躍した人です。後にプラハ、ベルリンを経て晩年はアメリカで過ごし、マーラーの妻アルマの作曲の先生だったというだけの地味な

作曲家でした。しかし私は情感溢れる旋律、豊潤な和声、華やかな管弦楽法を駆使し、後年に続くリヒャルト・シュトラウスをも彷彿とさせる天才作曲家だと思います。

デンマークの詩人アンデルセンの童話「人魚姫」にもとづく作曲ですが、描写を含む「標題音楽」的でありながらも非常に内面的な「絶対音楽」に私には思えてなりません。特に第3楽章は、後に作曲者自身が「死の交響曲」として改作しようと考えていたそうです。

人魚姫の物語は皆さんご存知の「人間と人魚の禁断の恋」の物語です。遭難した王子を助け、恋してしまう人魚姫。どうしても人間になりたいという思いで、舌を切り取られる変わりに海の魔女から2本の足を得る。だがしゃべれない姫を王子は自分を助けてくれた人魚とはわからず、他の国の王女を結婚してしまう。落胆した人魚姫は、王子を刺し殺せば人魚に戻り、また海底で暮らすことができると知るが、自らの命を絶ってしまうという物語で、片想いの恋は成就することなく、悲しい結末を迎えます。

第1楽章（ほどよく躍動して）海底の描写、独奏ヴァイオリンによる人魚姫のテーマ、そして嵐、船の遭難、王子の救出。次々とおとずれる事件に、曲も目まぐるしく変化します。**第2楽章**（大きく動いて、ざわめくように）海底の魔女のところに行き舌を切り取られる。人間界への旅立ち。王子の結婚式での舞踏会。人魚姫の落胆。特に舞踏会のワルツはウィーンの芳香あふれる流れと悲哀に満ちて独特の雰囲気を醸し出しています。**第3楽章**（苦悩に満ちた表現で、たいへんゆっくりと）人魚姫の苦悩、絶望、死の決意、そして昇天。これまでの旋律が回想され、有機的に結びつき、壮大なクライマックスを築いていきます。

作曲の動機は定かではありません。この人魚姫の作曲が始められた1902年はマーラーが結婚した翌年で、その妻となる弟子のアルマに密かに想いを寄せていたツェムリンスキーの成就しえない片想いの気持ちを「人魚姫」に託したという推測は、あまりにも短絡的かもしれません。しかし、単に標題音楽、描写音楽を作曲することが彼の目的ではなく、アンデルセンの題材を借りて、人生の悲劇や死を抽象化して作品に残したかったのでしょう。もちろん同時期にシェーンベルクによって作曲された「浄夜」や「ペリアスとメリザンド」に触発されていたのは言うまでもありません。流麗なメロディ、変幻自在の和声、そして妖艶な響きを存分にお楽しみください。

イラスト：水谷恵美

本日の出演者

【コンサートマスター】
立田祥子

【第一ヴァイオリン】
石本恵理
上田佳津子
大橋一郎
大村雅子
笠松秀臣
亀井玲子
小林吉範
鈴木薫
秦一宜
松岡寛親
横田富美子
吉岡一郎

【第二ヴァイオリン】
上原剛介
上原佐貴絵
鎌田真貴
佐分利幸江
富田八江子
永田匡
根守弘和
深沢武夫
松橋冴子
溝田範子

【ビオラ】
浅野さとみ
内田綾美
大橋かおる
小名康仁
島信之
奈良林弘子
星乗昭
若林繁
渡部玲子

【チェロ】
岩田理人
大塚啓子
大村賢治
倉沢倫子
小松高明
瀬川清
田頭扶
中村公一
野中能久
日澤優
福原耕二

【コントラバス】
上村啓介
神代順子
金子豊
菊池克彦
小西祐作
小林真弓
星野紫穂

【フルート】
木村純一
木村眞諭紀
佐藤洋行
篠原梨恵

【オーボエ】
深町良和
二村直子
本間広樹

【クラリネット】
一瀬直美
関山志保
時田雄
半藤嗣人
山本聡

【バスーン】
伊吹直子
遠藤由紀子
菅原斉
水谷哲

【ホルン】
木下泰斗
近藤利昭
潮見恵子
嶋村恒夫
林田朋子
藤井茂司
山内正晴

【トランペット】
酒井崇行
丹羽奈穂美
西岡宏

【トロンボーン】
新井恵美
上田浩平
坂田圭
佐野義人
薮崎裕至

【チューバ】
渡邉鉄雅

【打楽器】
大澤香奈
鈴木充
都筑裕
春田美穂子

【ハープ】
小橋ちひろ
堀米綾